

書 評

●北原 光夫 (慶應大病院・病院経営業務担当執行役員)

内科診断学 [CD-ROM 付]

第 2 版



編：福井 次矢, 奈良 信雄

B5 頁 1,328 2008 年
 定価 9,975 円 (本体 9,500 円 + 税 5%)
 [ISBN 978-4-260-00287-5] 医学書院刊

40 数年前に初めて、診断学の本を手にした時にはいよいよ臨床教育が始まるのだという戦慄を覚えたことを思い出す。

医学のどの分野にゆくにせよ、医師になるための通過点の一つが内科診断学である。

したがって、臨場感にあふれる内容であり、合理的に理解されるべき必要がある。本書の特色に挙げられているように、病態生理学的メカニズムを理解することにより、丸暗記からの脱却を図っている。このような努力を著者らが払うことにより、内科診断学へ入りやすくしている。

目次を見ると、初版に比較するとページ数が増加しており、第 2 版の充実さがうかがわれる。

まず、症候編を見ると、一つのフォーマットによって構成されていて、解説が明解になっている。各症候ごとに疾患の頻度と臨床的重要度が挙

げられていることは、症候を経験する医師にとってはとても有意義である。

また、診断の進め方として、フローチャートが添えられており、一層診断学の本としての役割を果たしている。症候編に対しては約 490 ページが費やされていて、内科診断学の充実性を意味している。

疾患編のセクションも同様に 400 ページ以上が割り当てられている。臓器系統別に各章が分けられており、診断学を学ぶ者にとっては各疾患のエッセンスを把握できる便利さが備わっている。しかし、これらの中には、わが国では遭遇することの少ない疾患、例えばウィルソン病、ヘモクロマトーシス、異常ヘモグロビン症、サラセミアなどが含まれているが、これらを内科診断学の性格上、含めるのか、今後の編集方針によるだろう。

本診断学の最初の 2 章は診断の考え方と診断の進め方となっているが、まさにここを十分に理解することが医師としてのトレーニングの第一歩である。このセクションも図が十分に取り入れられており、理解しやすさに配慮がなされている。さらに聴診音を習得するために、CD を添えてあるのは大変うれしい。最後に主要検査の基準値と汎用される略語一覧が載せられてあるのも便利である。

医師としての道を進む者にとっては、一回は読むべき成書の中の一冊である。